

## 『フランケンシュタイン』にみられる知性と感性の分裂

田 中 淑 子

Sense and Sensibility in Mary Shelley's *Frankenstein; or, The Modern Prometheus*

Yoshiko TANAKA

### Abstract

“Sense and Sensibility” is a controversial topic in the background of the transition from Classicism to Romanticism. Mary Shelly's *Frankenstein* reflects the change of the times, working toward a sort of cognitive estrangement from sense and sensibility in the form of domestic affection, education and science. Victor Frankenstein's aims and dangers of scientific discovery not only violate the norm of human culture, but also destroy his domestic affections. But ironically his social isolation is reinforced when his creature Monster finds that he has no link to any other beings in existence and claims his wife to satisfy his hunger for domestic affection. Mary Shelley doesn't seem to believe that enlightenment by sense can be useful in the development of human society, like her father William Godwin, while she also doubts whether sensibility can compensate for what the acquirement of knowledge cannot make up, unlike her mother Mary Wollstonecraft. The book concludes in duality where sense and sensibility cannot reconcile to each other.

Key Word: M. Shelley's *Frankenstein*

メアリ・シェリー (1797-1851) の『フランケンシュタイン』 (*Frankenstein; or, The Modern Prometheus*, 1818) は、一つの箱がさらに一段と大きい箱にぴったり入るような「入れ子」細工の箱の形をしている。一番外側の大きな箱は、ロバート・ウォルトン (Robert Walton) の姉サヴィル夫人 (Mrs. Saville) 宛の手紙であり、12月から8月 (1792~99年の間、ヴィクターのスコットランド出発から逆算) までの北極探検の報告である。2つ目の箱は、ウォルトンに救出されたヴィクター・フランケンシュタイン (Victor Frankenstein) が語る人造人間 (モンスター) 創造の顛末である。3つ目の一番奥の箱は、ヴィクターと再会したモンスターが語る伝記から成る。

このモンスターを取り巻く外側二つの箱の登場人物ウォルトンとヴィクターには、共通のキーワードが存在する。女性の愛情に包まれた家庭とそこでの独学、彼らを知的解放へと駆り立てる強烈な情熱が、それである。ウォルトンは、孤独な青春時代を、姉の優しい保護のもとに過ごし、幼い頃から読み続けた航海の物語が、彼に北極探検の夢を膨らませたと語る。彼の情熱は、たえず「何かどえらい目標を達成する栄光を選び」(p. 270)、その結果未踏の楽園を求めて、北極探検をしているのである。一方ヴィクターの家庭は、公職から退いた慈悲深い父と家庭内天使のような母、そして優しく自制心の強い養女で彼の許婚でもあるエリザベス (Elizabeth) から成る。彼もまた孤独で、コルネリウス・アグリッパ (Cornelius Agrippa) やパラケルスス (Paracelsus)、アルベルトゥス・マグヌス (Albertus Magnus) という時代遅れの書物を独学し、それらから生命錬金の夢を膨らませている。情熱は知識欲となり、「自然の女神のヴェールを持ち上げてみたい」(p. 209)、やがては「生と死の境界を打ち破り、闇の世界に光の放流を注ぐ最初の人」(p. 314) になりたいとその野心は飛翔し、ついには人が神になりうるのかという挑戦へと彼を駆り立てていくのである。彼らは皆、女性の優しい感性の庇護の元にありながら、知性によって独立を図る人々であり、科学を原動力に、知性が約束する栄光に魅了された情熱家であり、極めて啓蒙主義的な人々だといえる。人間の進歩と幸福につながる偉業を成し遂げようという知的衝動と、家庭に象徴される個人の愛情や感性との対比の構図に、メアリ・シェリーは、『フランケンシュタイン』以降の作品においても、興味を持ち続けた。作者の父ゴドウィン (William Godwin) 流の合理的な人間の進歩に対して、家庭が体現する感性—affection, gratitude, soft and benevolent mind, soul and sensation など「高度に洗練された本能」であると『ジョンソン辞典』で定義された「感性」が、いつも対峙するのである。知性の暴走を感性が抑えられるのだろうか、啓蒙的理性によって埋められない部分を、感性が橋渡しできるのかが、メアリ・シェリーの関心であることは明白である。それは、フランス革命を媒介に、彼女の両親に多大な影響を与えた理性と感性の問題を、娘メアリ・シェリーが引き受け、新たに答えを出そうとする作業にもみえる。『フランケンシュタイン』においては、理性と感性の問題を解く鍵は、ヴィクターの知的衝動によって創造され、極めて人間的感情をもって生まれたモンスターが握っている。モンスターが知識を獲得し成長する過程に、知性と感性の問題に対する答えが隠されていると思われるからである。

モンスターが知識を得る過程は、11章から16章の極めて長い、彼が語る伝記の中に描写される。モンスターは、潜んでいたド・レイシー (De Lacey) の小屋の覗き穴から、フェリックス (Felix) がサフィー (Safie) の教育に使っていたヴォルネイ (Volney) の『諸帝国の没落』 (*Ruins of Empires*) から、「人間が徳高く高邁でありながら、同時に邪悪で卑しいものである」

(p. 385) ことを知る。さらに森で拾ったプルターク (Plutarch) の『英雄伝』 (*Plutarch's Lives*) を読み、英雄の崇高さやその徳の高さへ激しく憧れると共に、その悪徳も知る。ところが同時に、自分には歴史がなく、歴史から排除された存在であること、人間史が示すいかなる文化的コードからも自分の存在理由を解説できないことも知るのである。ゲーテ (Goethe) の『若きウェルテルの悩み』 (*The Sorrows Of Werter*) を読んだモンスターは主人公の死に涙し、人間の愛情を知るが、自分には涙してくれる人間関係が欠落していることに気付く。ミルトン (Milton) の『失樂園』 (*Paradise Lost*) では、モンスターは自分が「どんな生物に繋がる絆のないアダム」 (p. 396) に類似していると思うが、創造主に見放されたサタンにも似ていて、サタンの怒りにも共感するのである。こうして、モンスターは、理性を覚醒させていくと共に、自らが人間の神話や歴史からも、社会や人間関係からも排除された者、人間の制度からはみだす “a blot upon the earth” (p. 386) あると認識するのである。モンスターは、知識が増えれば増えるほど、自分いかに惨めなのかを悟り、「創造主よ、なぜおまえが憎悪の中逃げ出すほど忌まわしいものを創ったのか、神は憐れんで人を自分の似姿に、美しく魅力的に創ったのに対して、おれはおまえの醜い姿に似ているのだ。似ているからこそ一層身の毛がよだつのだ。サタンには仲間や悪魔がいて崇め、勇気づけられた。だがおれは孤独な嫌われものだ。」 (p. 397) と逃げ出した創造主を呪う。知識獲得による理性の覚醒には、「精神の解放」と「傲慢の危険性」がもろ刃の剣のように不即不離の関係で作用し、モンスターが、その負を引き受けているのだ。さらに注目すべきことは、モンスターがどのように学ぼうとも、神尾美津雄氏が指摘するように、「人間史の外側の歴史」 (p. 153) からの創造であるために、人間の枠内では歓迎されないことである。モンスターの知識には歴史がない、人間の経験の歴史がないという事実は、人間性に付随する道徳感情が経験知への信頼なしに展開しうるのかという新たな問題へと、作品を導くのである。

モンスターは日常的な経験を、ド・レイシ家の壁の小さな覗き穴から観察して、学習することになる。つまり人間性の原理の解明を試みるのだ。モンスターがド・レイシ家から学んだ人間性の原理とは、次のようなものだ。「性の違いや子供の誕生……父が子供の微笑<sup>ほほえ</sup>みをどんなに慈しむものか、兄の攻撃的感情がいかに激しいものか、母親の生活や監督がいかに尊い配慮に包まれているものか、若者の精神はいかに伸びて知識をうるのか、兄や妹について、そして人間というものを互いに結びつけるさまざまな関係について」 (p. 387) である。つまり生物としての人間の性の原理と、人間の家族関係・人間と社会の関係における人間の準拠を学んだのだ。だから、モンスターは、ド・レイシ家の窮乏に同情し薪と食物を供給する優しさを示すのである。故国から追放され、貧しくとも家族皆が肩を寄せ合い、親子、兄弟、恋人が

愛情でしっかりと結ばれているド・レイシイの家庭は、モンスターには理想の家族と写る。一家に受け入れてもらえれば、モンスターは孤独から解放されるのだ。しかし、モンスターの願望は、息子のフェリックスに、人間業とは思われない力で棒で容赦なく叩かれることで挫折する。人間社会の外側に追放されたモンスターは、この作品のタイトルページに記されたミルトンの『失樂園』のアダムの科白、*Did I request thee, Maker, from my clay/To mould me man? Did I solicit thee/From darkness to promote me?* を嘆息せずにはいられない。やはり人間の経験が蓄積された歴史から乖離した理性によって作られた生物は、人間社会には入れないということなのか。ヴィクターの創造は、いわば人類の多様な経験が重層的に蓄積された歴史のないところでも、人間性は立脚するののかという、経験主義への挑戦でもある。モンスターが孤独なのは、知識獲得によっては得られない、人間の蓄積した経験知の歴史に繋がる家族の歴史が、彼にはないからである。モンスターが、非常に家族を持ちたがる理由はここにあるのである。このモンスターにみられる人間性からの疎外には、知的理性的な存在としての人間への急進主義的な信頼は、人間の感情の歴史を無視しては危険であるという、メアリ・シェリーの批判が込められているように思われる。「人間の本性には、理性の達し得ない領域があって、理性を覚醒するだけでは、人間の身上を揺り動かし精神を改善できない」という、フランス革命に失望し、新しい形の結婚に挫折し、理性崇拜から感性への揺らぎをみせた、作者の母ウルストンクラフトの言葉を思い出す。理性を覚醒させ特性を磨き上げて、尚乗り越えることのできない社会的障壁があるモンスター、その姿は作者や彼女の母の姿を彷彿させる。それでは果たして理性によっては埋められない部分を、感性が橋渡しできたのだろうか。生まれながらにして感性を備えていたとされるモンスターによって、それが検証されることになる。

誕生当時のモンスターは、純粹無垢で、高度に洗練された本能—感性の持ち主であった。1931年のジェイムズ・ホエール監督とモンスターを演じたボリス・カーロフのせいで、精神異常者の脳を移植され、言葉が操れない、首にボルトの刺さった凶暴なモンスター像が定着して久しいが、メアリ・シェリーのモンスターは実に心優しいのである。森にかかる月の美しさに涙し、川で溺れかけている少女を助け、ド・レイシイ家の老人の引く琴の音に感動する心を、誰に教えられもしないのに持っている。では感性とは一体何かということになるが、この作品においては、モンスターの感性を描写する言葉として、*a creature of fine sensations, feeling, emotions of gentleness and pleasure, being sensitive* などが使われている。18世紀後半に古典主義や理性への反動として使われた始めた感性という言葉には、“*sensibility*”や“*sentiment*”がある。“*sensibility*”は、洗練された鋭敏な感性を意味し、研ぎ澄まされた身体的感覚、なかでも苦悩に敏感に反応する感性をいう。エドマンド・バーク(Edmund Burke)の「崇高」の概念

は、この精神的苦痛を喜びに変えて、感性を最大限に解放することのほかならない。それに対して、“sentiment”には「感情」「情緒」に意味のほかに、「道徳的見解」「意見」などの意味もあり、本来は心に沸き起こる感情や、それに基づく道徳判断を指した。マッケンジー（Henry Mackenzie）の『感性の人』（*The Man of Feeling*, 1771）の主人公ハリー（Harley）は、他人の不幸に同情し、貧しい者に慈悲深く施しを与え、みずから逆境や迫害に耐え、抑えることのできない感情の高ぶりを涙や紅潮した頬などの身体的兆候に示す。モンスターは、センチメンタル・ノヴェルの主人公のように、他人の苦しみや孤独を理解し、不正に怒りそして苦痛に涙する。しかし、彼には彼の“sentiment”を展開する信頼できる人間関係がなく、それが他者との共感や慈悲心に発展する基盤がないのだ。溺れかかった少女を助け、その代償に肩に銃弾を受けるというモンスターの感性の悲劇的な軌跡は、感性もまた家族やそこでの経験という基盤を与えられて、社会化され「連帯」にまで昇華しなければ、暴走し挫折することを示している。

彼の“sensitivity”も苦痛を敏感に感じ取るが、それはバークの崇高のように、苦痛を解放に変換する力をもたない。彼の精神を解放し自由にするどころか、却って己の創造者の理性への懐疑を際立たせる。バークの唱えるように、苦痛が快樂になるには、理性と感性が対立するのではなく互いに内包する関係になければならない。というのは感性が自由奔放に飛翔しても、理性がその行き過ぎを抑えるからこそ、苦痛や恐怖から崇高が引き出せるのである。しかし、この作品では、その理性が怪しいのである。“sentiment”や“sensitivity”を抑圧した環境の中での行われたヴィクターの創造は、道徳的に転落する脆弱さと矛盾を露呈し、その創造物によって自らの人間性を破壊されるのである。言い換えれば、家族から離れ、性的パートナーによらず生命を創造した不健全な環境が、彼の理性に罪を犯させたのである。モンスターが誕生した日に、抱いたエリザベスが死体へと変身するというヴィクターの見た恐ろしい夢は、彼の知性のおぞましい結末を予言していたかのようである。一方、家族を与えられないモンスターの悲しみは、ヴィクターの家族を殺害するという復讐に変貌する。復讐の鬼と化したモンスターは、ヴィクターの主人となり、伴侶の創造を彼に命ずる。互いに内包し合わない理性と感性は、奴隷か専制君主になるしかないのだ。ヒューム（David Hume）が『人間の本性に関する研究』（*A Treatise of Human Nature*, 1739-40）の中で述べた「理性は感情の奴隷である」を絵にしたような二人の追跡劇は、大変興味深い。が、感情が人間の基本的存在であり、理性は感情の奴隷に徹すべきであると考えたヒュームにおいては、感情が理性をも内包するので、感情と理性は厳密な意味では対立しないのである。が、この幸せなコンビネーションが不可能であるところに、この作品の問題があるのだ。知性と感性のカウンターバランスの上に人間性が成り立つべきだと作者メアリ・シェリーが考えていたとしても、その理想の関係を、最早作品の中

に見いだせていないようだ。19世紀になって、人間の想像力は理性と感性が把握する無数のものを再構成し統一する力を失ったのだろうか。その苦しみこそ、「現代のプロメテウス」の苦悩なのではないだろうか。モンスターの語源がラテン語“monere”「警告する」であるならば、モンスターは理性と感性がもはや統一体でいられないことを警告するために登場したのである。こうして、ヴィクターとモンスターは、それぞれ分断された知性と感性を抱えたまま、北限の地で対決する。

ヴィクターとモンスターの最後の対決の場は、北極である。従来のいかなる文化的コードをも白紙に戻す白一色の不条理な風景のなかへ、モンスターはヴィクターをおびき出す。ヴィクターは、死を覚悟するわけだが、その前に、盛んに義務と責任についてウォルトンに語るのである。「若い時には、自分は何か大きな偉業をなす運命にあると信じていた。わたしの感性は深いものだし、めざましいことを遂げるにふさわしい冷静な判断力もあった。(p. 484) ……しかし、わたしは情熱にまかせた狂気の発作で理性ある生き物を創造し、彼に対して力及ぶ限り幸福を福利を保証してやる務めを負った。それが、わたしの義務だった。だがそれにもまさる至上の義務があったのだ。自分と同じ人類に対する義務の方を、先に考慮せねばならなかった」(p. 490) と語る。一方、ウォルトンも真理の探求か、乗組員の安全かと義務と責任の問題に悩む。このような義務と責任の強調は、1831年版の改訂によるところが多い。それは、作者自身が節度ある作家として社会の容認する道徳的見解を示さなければならない圧力を感じ、「受け入れ可能」な作品にする必要があったからであろう。だから結末でヴィクターはウォルトンに「大望は捨てなさい」と警告しながら、「なぜわたしは、こんなことを言うのだろう。自分は希望を失ったが、他の人は成功するかもしれないのに」(p. 491) と矛盾した発言をするのだ。ウォルトンだけは既存の安全な文化圏に生還を許されたかのようなのだが、作品はイギリスで待つ姉の幸福な家庭へ彼が帰国するというファミリー・ロマンスで幕を閉じることを拒否しているように感じる。

一方モンスターは、ヴィクターの遺骸を前に、「恐ろしい利己心につき動かされながら、心は悔恨の毒をなめた」(p. 493) と語る。さらに続けて「かつて美と荘厳な善との崇高な超越的な夢に心満たされていた同じ自分なのかと、疑うほどだ。……おれは、いつも愛と友情を望み、いつもはねつけられていた。これが不当なことではないというのか。全人類がおれに罪を犯しているというのに」(p. 494) とウォルトンに語り、自分のようなものがまた作られることのないようにと、後悔と責任感から、甲いの薪を積み上げ、自らを燃やして死ぬと言い残して、氷海の中に消えて行く。ここでも不正に対する怒りと、後悔や犠牲が対立している。しかし、だいたい義務や責任、ファミリー・ロマンスなどという概念は、北限の地で役に立たない。ポ

ール・キャンターが指摘するように、「北極は人間的地平の限界を示している」(p. 183)のだ。人間から思考を奪ってしまう白い風景の中では、人間がいかなる記号を記そうとも、書き記すはじから意味は消され、滑っていつてしまうのではないだろうか。こうして理性も感性も、互いに人間性を保証するものとして機能せず果てる。ここには、対立する一方が他方を消去したことによる、優越性もカタルシスもない。双方の消滅があるのみである。知性と感性は一人の人間の中で統合されることなく分断されたままであり、共に互いに閉塞している。分断された意識という得体のしれない存在への不安と恐怖、それがメアリ・シェリーが、両親から受け継いだ理性と感性に関する命題に対して出した答えなのではないだろうか。

メアリ・シェリーの模索は、『フランケンシュタイン』以降の作品 *Valperga* (1821) や *Perkin Warbeck* (1830) にも引き継がれ、*The Last Man* (1826) では、疫病の蔓延でたった一人の最後の人間になったライオネル・ヴァーニイ (Lionel Verney) が、己の想像力も意志の力も統一できないまま、友を求めてなのか死を求めてなのか判然としないまま、海に向かうところで、作品は終わる。知性と感性は、互いに制約を受けることすら難しいのである。決着はつかないままに、物質文明と拝金主義、労働者による革新運動に揺れるヴィクトリア時代 (1819–1901) に突入し、G. エリオット (George Eliot) によって、北限の地で相果てた知性と感性は、家族と社会の連帯が与えられ、「共感」へと変貌していくのである。そして人間のテーゼに挑戦してくるモンスターは、エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell) の *Mary Barton* (1848) の中で、選挙権を求めチャーチスト運動にのめり込んでいく労働者の姿で再登場する。この時モンスターは、ギヤスケル夫人に間違えられてフランケンシュタインと呼ばれている。

本稿は、イギリス・ロマン派学会 第23回全国大会のシンポジウム、「理性と感性—メアリ・ウルストンクラフトとメアリ・シェリー」で口頭発表したものに加筆したものである。

## References

- Shelley, Mary. *Three Gothick Novels: The Castle of Otranto, Valperga, Frankenstein*, ed. Mario Praz, Penguin Books, 1963. (本文中の引用ページ数は、この版による.)
- The Novels and Selected Works of Mary Shelley*, vols. 1–8, ed. Pamela Clemit, London: William Pickering, 1996.
- Baldick, Chris. *In Frankenstein's Shadow: Myth, Monstrosity and Nineteenth-Century Writing*, Oxford UP, 1987.
- Botting, Fred. *Making Monstrous: Frankenstein Criticism Theory*, Manchester and New York: Manchester UP, 1991.
- Boulton, James T. (ed), *Edmund Burke: A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of the Sublime and*

田 中 淑 子

- Beautiful*, London: Basil Blackwell, 1958.
- Cantor, Paul A. *Creature and Creator: Myth-Making and English Romanticism*, Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Crane, R. S. "Suggestions toward a Genealogy of the Man of Feeling," *The Ideas of the Humanities and Other Essays*, vol. 1, Chicago: The University of Chicago Press, 1967.
- Goldberg, M. A. "Moral and Myth in Mrs Shelley's *Frankenstein*," *Keats-Shelley Journals*, viii, 1959, pp. 27-38.
- Sage, Victor (ed.). *The Gothic Novel*, Macmillan, 1990.
- Smith, Johanna M. *Mary Shelley Revisited* (The Twayne's English Authors Series), Twayne Publishers, 1996.
- Spark, Muriel. *Mary Shelley*, Constable London, 1988.
- Veeder, William. *Mary Shelley and Frankenstein: The Fate of Androgyny*, Chicago: The University of Chicago Press, 1986.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Women* (1792), (ed.) Carol H. Poston, New York: London: W. W. Norton & Company, 1988
- 岡地嶺, 『イギリス・ロマン主義と啓蒙思想』, 中央大学出版部, 1989.
- 神尾美津雄, 『他者の登場—イギリス・ゴシック小説の周辺』, 近代文芸社, 1994.
- J=J= ルセルクル, 『現代思想で読むフランケンシュタイン』, 今村仁司／沢里岳史訳, 講談社選書メチエ105, 1997.
- 水田珠枝, 『女性解放思想史』, ちくま学芸文庫, 1994.
- ベイト, W.J. 著 『古典主義からロマン主義へ』, 小黒和子訳, みすず書房, 1993.